

## 理系女性のエンパワーメントプログラム

(実施期間：平成 18～20 年度)

実施機関：東京農工大学（代表者：小畑 秀文）

### 課題の概要

女子学生が博士研究員などを経て女性研究者として育ち、出産・育児・介護により研究活動の継続困難に陥ることなく研究活動を推進し、女性が教員として積極的に登用されるよう全学をあげて取り組む。現有の男女共同参画推進室、学内各種委員会及び女性教員ネットワーク等と連携する形で女性キャリア支援・開発センターを設置し、支援活動を実施する。

- (1) 目標値を明示した男女共同参画推進のポリシーと行動計画を策定する。
- (2) 女子学生へのキャリアガイダンスやメンター制度を整備する。
- (3) 出産・育児・介護に伴う負担の軽減を目的として提携事業を用いた費用支援ならびに研究支援員を配置して研究の継続を支える。
- (4) 卒業生ネットワークを構築して「母校に戻ろうキャンペーン」を実施し、卒業生が社会人大学院生として学び、研究支援員として就業して母校の研究活動に参加することを推進する。

#### (1) 総合評価（所期の計画以上の取組が行われている）

女性研究者の少ない工学系、農学系のみの中規模大学でありながら、女性教員採用比率の大幅な増加や、学内保育所の設置などにより女性教員を取り巻く環境改善を達成している。自大学出身者を対象として「アフターケア」を拡充する取組とともに、女子大学院生が女子学生を、また、女性教員が女子大学院生を指導する仕組みは身近なロールモデルの提示として効果的であり、専攻が絞り込まれた中規模大学での有効なモデルになり得るものであり、高く評価できる。また、所期の目標にはなかった農工大式ポジティブアクション「1プラス1」の導入を図るなど、女性研究者の育成に対する大学のマネジメントの積極的な姿勢も高く評価できる。取組終了後もキャリア支援・キャリア加速・キャリア開発など、発展的な女性研究者育成策を打ち出し、課題実施により形成された着実な体制の下で、女性研究者の増加・育成が期待できる。

<総合評価：A>

#### (2) 個別評価

##### ①目標達成度

女性研究者の少ない工学系、農学系での女性教員採用比率を課題実施以前より大幅に増加させ、ほぼ目標に達していることが評価できる。さらに、女性教員増加策として女性教員を採用した場合に、特任助教分の人件費を全学より追加措置するという、所期の計画にはない独自の農工大式ポジティブアクション制度「1プラス1」の導入も行い、高く評価できる。

##### ②取組の成果

工学・農学の理系専門大学に特徴的なニーズをよく把握し、細かな配慮を行って成果を挙げている。また、本取組によってシステム改革が進み女性研究者を支援する環境も改善されており、女性教員採用比率や女性教員数が増加していることは高く評価できる。農工大式ポジティブアクション制度の導入も行っており、今後の女性教員増も期待できる。

### ③取組の妥当性・効率性

研究支援員配置制度、産休時期の専任ポスドク配置制度、女性研究者へのエンカレッジ策、女子大学院生が女子学生を、女性教員が女子大学院生を指導する仕組等、ニーズに基づいたきめ細かな取組が行われ、それらが機能しており、女性研究者を取り巻く環境は改善され、高く評価できる。また、計画の進捗に合わせ、ポジティブアクション制度導入等の改善策を迅速に行っていることも高く評価できる。今後も制度の利点や弊害について主体的に検討し、より充実した制度設計を目指すことを期待する。産休時期の専任ポスドク配置制度においてもポスドク配置期間の上限が6ヶ月となっており、被支援者には有効な制度である。今後は、支援を行うポスドクのキャリアパスの見通しも含め、制度設計の充実も期待する。

### ④波及効果

理工系大学のモデル的取組として、ポジティブアクション制度等、様々な取組がなされており、波及効果は高いと評価できる。数日にわたり実施されるサマースクールは参加者への印象も良く、次世代の理系選択支援の効果も大きいと期待できる。また、対象を卒業生に絞り込んで「母校に戻ろう」キャンペーンを行っている点も、啓発効果を発揮する上で意義のある取組と高く評価できる。

### ⑤実施体制の妥当性

学長のリーダーシップの下、女性キャリア支援・開発センターを設置し、本取組を実施してきた全学的な体制は妥当であると評価できる。今後、研究内容の異なる2つのキャンパスに所属する研究者の多様なニーズに対してきめ細やかに応える仕組を構築することを期待する。

### ⑥実施期間終了後における取組の継続性・発展性

実施期間終了後も、特任教員を確保して、キャリア支援・キャリア加速・キャリア開発など、発展的な女性研究者育成策を打ち出しているとともに、関連の自己資金充当も増加方向にあることは高く評価できる。農工大式ポジティブアクション「1プラス1」の導入を素早く決断するなど、女性研究者を育成しようとする大学のマネジメントの積極的な姿勢も評価できる。今後も課題実施により形成した着実な体制の下で、積極的な女性研究者の採用・育成を期待できる。農工大式ポジティブアクション制度は、優れた方策であるので、今後、枠の拡大やその効果の検証を行うことにより、より良い方策として展開させていくことを期待する。

## (3) 評価結果

総合評価	目標達成度	取組の成果	取組の妥当性・効率性	波及効果	実施体制の妥当性	実施期間終了後における取組の継続性・発展性
A	a	a	a	a	b	a